

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 〔研究ノート〕 幼児の美術鑑賞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島田, 由紀子, 江藤, 祐子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001423">https://doi.org/10.57529/00001423</a>

[研究ノート]

## 幼児の美術鑑賞

島田 由紀子 江藤 祐子

### 【要旨】

現在、地域の美術館と学校が連携した美術鑑賞教育は、数多く行われている。しかし、美術館と幼稚園や保育所等と連携し、幼児を対象とした美術鑑賞教育は少ない。そこで、美術館と幼稚園が連携した美術鑑賞の実践を通し、参加した幼児の様子と保護者の意見や感想を集約することで、課題を把握しようと試みた。実際に美術鑑賞会を行ったところ、ギャラリートークでは幼児の活発な発言があり、楽しむ姿が見られた。一方で、美術館での3つの約束（作品やケースに触らない、走らない、大きな声を出さない）が難しい場面や美術鑑賞への関心に個人差がうかがえる様子もあった。また、今回の美術鑑賞について保護者からの評価が高かったのは、幼児自身も楽しむことができたことや、学芸員のわかりやすい説明や幼児の発する言葉を聞き逃さずに受け止め共感することで、対話が成立していたことが要因であると考えられた。

### 【キーワード】

幼児 児童 美術鑑賞 美術館 親子

### 1. はじめに

かつてニューヨーク近代美術館で教育プログラムの担当をしていたアメリカ・アレナスによって日本に紹介された対話型鑑賞（アメリカ・アレナス、2005）が日本の美術館や学校教育に取り入れられるようになり、日本の美術鑑賞教育の在り方が大きく変わった。それまでは、美術館に行く事前学習として、鑑賞する作品や作家について授業で学び、その作品が描かれた時代背景や作家の意図、使われている画材などを知識として得た上で美術館に訪れ、学芸員や教師からの説明や解説文で答え合わせをする学習スタイルが主流であった。しかし、対話型鑑賞のギャラリートークで事前学習は行わず、初めてその美術作品と対峙して、「何が描かれているか」「どのように感じるか、思うか」ということについて、ファシリテーター（学芸員、教師等）の導きにより子どもたちが発言していく。その際、発言した子どもの意見を否定することはせず、また「はい」「いいえ」で回答するような言葉がけは行わず、必要以上の知識や解説の教授は行わない。美術鑑賞後、興味関心を持つ子どもは作品についての情報を尋ねたり調べたり主体的に取り組むことが考えられ、またそれが可能な環境を美術館や学校は用意している。

平成29年に告示された小学校学習指導要領の図画工作（文部科学省、2017）では、「表現及び

鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を次のとおりに育成することを目指す」とある。鑑賞に焦点をあてると、児童が美術作品と対峙するとき、感性や想像力等を働かせ思考し判断する中で、鑑賞したり表現したりする資質・能力を育むことが求められている。感性や想像力を伸ばすという観点で、対話型鑑賞をはじめとする、作品の視覚的情報や作品に対する鑑賞者の考えを重視する鑑賞教育が、作家や作品の情報に重きをおいた事前学習より相応しいことを示している。

かつて三澤（2006）は、学習指導要領で鑑賞教育に重きを置かれるようになっても教育現場に鑑賞教育がなかなか浸透していかないことを指摘していたが、10年以上経った現在、小学校や中学校、高等学校が地域の美術館と連携した美術鑑賞の機会を持つようになり、各美術館のホームページからその様子を知ることができる。一方、就学前の幼児を対象とした美術鑑賞の機会は少ない。金山（2006）は、幼稚園教育要領の中に鑑賞が含まれ実践されているが、それは友達間の作品鑑賞等であること、また幼児教育と学校教育には隔たりがあることについて指摘しているが、その実態は現在も大きく変わっていないことは、幼稚園や保育所等（以下、幼稚園等）と美術館が連携した美術鑑賞の報告が小学校以上と比べて極めて少ないことからわかる。

幼稚園教育要領（2017）の「言葉」には、自分の感情や意志などを伝え、それに応答することや、幼児が保育者や他の幼児と関わることにより心を動かされるような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること、が示されており、「表現」には、美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること、が記されている。幼児が美術館で、友達や保育者と美術作品と出会い、思ったことや考えたことを伝え合うことは、美術館におけるギャラリートークの有効性と重ねることができる。幼稚園教育要領の改訂の際、基本方針の中で、「言語能力の確実な育成、伝統や文化に関する教育の充実、体験活動の充実などについての教育内容の充実について」（文部科学省、2017）と示しており、美術館における幼児の美術鑑賞は、幼児期に育みたい資質・能力に沿った経験であると考えられる。

そこで本研究では、幼児を対象とした美術館における美術鑑賞の実践を通じ、未就学児の美術鑑賞の実践、実態から課題について明らかにする。課題を明らかにすることによって、幼児を対象とした美術館における美術鑑賞の機会を増やすことにつなげることが期待できる。

（島田由紀子）

## 2. 方法

幼稚園と美術館の連携による美術鑑賞会を企画、実施し、参加した保護者に質問紙調査を行った。美術鑑賞会の実施後、筆者らは実施記録によって振り返るとともに、美術鑑賞会を企画、実施する中で検討する必要があった事柄や保護者への質問紙調査の結果から、幼児の美術鑑賞の課題を明らかにする。

（島田由紀子）

### 3. アーティゾン美術館スクールデー実施記録

ここでは、令和3年6月14日（月）の公立のM幼稚園5歳児クラスへのアーティゾン美術館スクールデー実施記録について論じる。

#### （1）アーティゾン美術館の教育普及活動におけるスクールデー

公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館（以下、アーティゾン美術館）では、前身のブリヂストン美術館時代より、その活動の柱の一つとして教育普及に取り組み、幼児から大人まで、幅広い層の鑑賞者が美術や美術館を楽しめるよう、様々なラーニングプログラムを用意している。建物の建て替えによる約5年間の休館を経て、新たにアーティゾン美術館として開館した令和2年1月より、新しいラーニングプログラムの1つとして、展覧会開催中の休館日に学校団体の来館を受け入れる「スクールデー」をスタートした。通常の開館日に学校団体を受け入れる「スクールプログラム」も、ブリヂストン美術館時代から継続しているが、スクールデーでは、来館の学校団体だけの館内でじっくりと作品を鑑賞することができる。スクールデー/スクールプログラムは事前申込制で、受け入れの対象はいずれも保育所・幼稚園から大学院までである。またアーティゾン美術館では、学生は大学院生まで入館無料とし、若い年齢層が気軽に足を運び、美術に親しむ機会を積極的に提供している。

#### （2）M幼稚園

公立のM幼稚園（以下、M幼稚園）5歳児クラスの子供は、アーティゾン美術館が教員・保育者向けの美術館紹介として開催している「ティーチャーズプログラム」への参加をきっかけに、スクールデーのことを知った筆者（島田）が仲介し、実現した。M幼稚園は、アーティゾン美術館から徒歩20分ほどの場所に位置し、同園と同じ敷地内にあるM小学校が、ブリヂストン美術館時代よりスクールプログラムに繰り返し参加しているという偶然があった。住まいも近隣で、M幼稚園卒園後、同小学校に通う児童も多い上、同じ区内の徒歩圏内にあるアーティゾン美術館は、同園園児たちとその家族にとって身近な存在である。

#### （3）スクールデー内容

スクールデー/スクールプログラムの実施に際しては、各学校団体の担当教員・保育者と可能な限り事前の打合せを行い、各学校団体のニーズに合わせてプログラム内容をカスタマイズして準備している。スクールデーへのM幼稚園の子供に際しても、同園副園長、アーティゾン美術館教育普及部、及び筆者ら（島田・江藤）が、電話ならびに対面で、会場の下見も含め複数回打合せを行った。M幼稚園からは、親子での美術鑑賞会として幼児と保護者とで参加させたい、との希望があり、特に当日の流れ、時間配分、紹介する作品等について、綿密な打合せの上で検討し、以下の主な内容について決定した。

- ・冒頭のオリエンテーションにて、アーティゾン美術館から、美術館での3つの約束（作品やケースに触らない、走らない、大きな声を出さない）を説明する。
- ・幼児と保護者を2つのグループに分け、グループごとに学芸員がギャラリートークを行う形で、アーティゾン美術館所蔵作品の中から、同じ作品2点を鑑賞後、自由鑑賞とする。
- ・展示室での鑑賞後、アーティゾン美術館が所有するオーギュスト・ロダン《考える人》のレプリカをレクチャールームで自由に触る時間を設ける。冒頭のオリエンテーションで同レプリカを紹介し、「館内の作品には触れないけれど、このレプリカは触ってよい」ということを幼児たちに伝える。

また、筆者（島田）が保護者向けの質問紙調査を実施し、國學院大學子ども支援学科の学生2名が、自由鑑賞後に幼児が遊ぶことのできる工作「動く動物の製作あそび」を用意した。

#### （4）開催概要

- ①開催日時 令和3年6月14日（月）9:50-12:30
- ②主催 アーティゾン美術館
- ③会場 アーティゾン美術館展示室（4階-6階）、レクチャールーム（3階）
- ④団体名 M幼稚園5歳児クラス
- ⑤参加人数 幼児およびその保護者：50名（各25名）、引率保育者3名、大学生2名、大学保育者1名、計56名
- ⑥受入担当 解説実施：アーティゾン美術館教育普及部学芸員2名  
運営補助：アーティゾン美術館インターン（大学院生）2名
- ⑦タイムスケジュール  
9:50-9:55 美術館前集合・入館→レクチャールームに移動、お手洗い休憩  
10:00-10:15 レクチャールームにてオリエンテーション→2グループに分かれて展示室へ  
10:15-11:10 STEPS AHEAD展鑑賞  
グループごとに2作品についてギャラリートーク→自由鑑賞  
鑑賞が終わった家族はレクチャールームで「動く動物の製作あそび」を体験  
11:10-11:20 レクチャールームにてまとめ  
11:20-11:35 お手洗い休憩、昼食準備  
11:35-12:30 レクチャールームにて昼食 保護者が質問紙に記入  
オーギュスト・ロダン《考える人》のレプリカを自由に触る時間  
12:30 終了・退館

#### （5）鑑賞作品ならびに幼児の反応

参加の幼児たちは皆、アーティゾン美術館への来館は初めてとのことで、集合時には「アーティ

ゾン美術館」という言葉を連呼している幼児もあり、館名を覚え、来館を楽しみにしていた様子が見えられた。

ギャラリートークでは、彫刻作品1点、絵画作品1点を紹介した。5、6歳の幼児が親しみやすいと考えられる作品を選び、ライオンがモチーフとなっているエジプト テーベ（ルクソール）《セクメト神立像》（Fig.1）、母と子がリラックスする姿が描かれたメアリー・カサット《日光浴（浴後）》（Fig.2）を取り上げた。ギャラリートークは、作品の視覚的情報を中心に幼児たちに質問し、幼児たちのコメントを聞いて一緒に鑑賞するというスタイルで行い、作品の説明については、幼児たちにわかりやすい容易な言葉を用いた。冒頭に、作品を見て感じたことは全て正解であり、安心して自由に発言して欲しい旨を伝え、参考作品の図版も用意して紹介した。2点の作品のいずれにも幼児たちは非常に興味を示し、積極的な鑑賞の様子が見受けられた。

《セクメト神立像》は、アーティゾン美術館の常設の彫刻作品の1点で、雌ライオンの頭と、人間の女性の姿を合わせ持つ古代エジプトのセクメト神の立像である。セクメトは、古代エジプト語の「力強き者」から派生した言葉で、太陽神ラーの娘として、破壊や疫病をもたらすことに由来するが、敵を退け、病を治す慈悲深い神の役割も担った。そのため、古代エジプト第18王朝の時代、アメンヘテプ3世の病からの快復を祈願して、こうしたセクメト神像がおおよそ730体もつくられた。額の首を括弧で威嚇するコブラは、聖なる蛇ウラエウスを表している。その背後にある日輪、太陽円盤は、太陽神ラーとの関係を示すもので、頭には、胸まである長い鬘を被り、首元には神が身につける幅広の襟飾りをつけている。また、左手にはパピルスを模した杖を持ち、欠けてしまった右手には、生命のシンボル「アンク」を持っていたと考えられている。

《セクメト神立像》は、ブリヂストン美術館時代より、幼児・児童に親しまれてきた作品である。高さのある彫刻作品のため、本作のギャラリートークでは、正面を中心に作品のまわりを取り囲む形で立って鑑賞した。「何の顔だと思う？」という質問に対して、幼児からはすぐに「ライオン」や「虎」と回答があり、「ライオンキング」といった発言もあった。体幹部が女性の神の石像であること伝え、幼児たちは驚きの反応を示していたが、「人間と動物の合体？」と理解を確認するコメントもあった。石像であることに対して「化石だ」という発言や、「何年前に生きていたんだろう」という疑問も出た。欠損している部分に関して「食べられた」「誰が壊したの」と、興味を持っていた幼児が多かった。エジプトの石像であることを伝え、「ツタンカーメン」との発言があり、参考作品としてツタンカーメンのマ



Fig.1 エジプト テーベ（ルクソール）  
《セクメト神立像》  
新王国時代 第18王朝 アメンヘテプ3世治世  
花崗閃緑岩あるいは花崗岩  
アーティゾン美術館所蔵

スクの図版を見せると「こわい」といった感想があったが、付けひげに対して「何これ」と関心を示す幼児もいた。同じく参考作品として、坐像のセクメト像の図版を見せると、「スピノサウルスみたい」という反応があった。「《セクメト神立像》の頭の上についている動物は何だと思う？」という質問には、すぐに「キングコブラ」という回答があり、幼児はコブラを見つけ、そこからコブラが登場する「アラジン」を連想していた。蛇の神性の理由を説明すると、蛇の動きを真似する幼児が4名見受けられた。たてがみについては、「焼きそばみたい」というコメントがあった。ギャラリートーク後には保護者に「おもしろかった」と感想を言う幼児もおり、しばらくの間《セクメト神立像》を親子で鑑賞している姿も見られた。

《日光浴（浴後）》を描いたメアリー・カサット（1844-1926）は、アメリカ、ペンシルヴェニア州生まれの女性画家で、画家を志して21歳でパリに渡る。新しい絵画表現を模索するなかで印象派の画家たちと出会い、1879年の第4回印象派展に出品し、その後、第7回を除き第8回まで全ての印象派展に参加した。軽やかな筆使いと明るい色彩で、身近な女性たちの日常を描き、独自の画風を確立した。母子像は、カサットが生涯描き続けた主題で、特に聖母子像を連想させる、裸の子どもを伴う浴後の親子を繰り返し描いた。本作の題材も、水辺のほとりに寄り添ってすわる母と子の姿で、モデルはこの当時のカサットのお気に入りのモデル、アントワネットとその息子のジュールである。背後には、明るい色の花と周囲の緑、水面に映り込む木々の揺らぐ様子が捉えられている。



Fig.2 メアリー・カサット《日光浴（浴後）》  
1901年 油彩・カンヴァス  
アーティゾン美術館所蔵

本作のギャラリートークでは、落ち着いてじっくり作品と向き合えるよう、床に座って鑑賞した。「何が描かれていますか？何が見えますか？」という質問に対しては「赤ちゃん」「お母さん」という回答、また、花に対して「紫陽花」という回答があった。実施当日は梅雨時の6月だったため、紫陽花に接する機会が多かったことが影響したのかもしれない。「お母さんと赤ちゃんは何をしているところでしょう？」という質問には、「水遊び」「泳いだ後」「服をきているところ」「朝風呂」と回答があり、「（赤ちゃんが）裸なのが変」「お母さんの服が素敵」「赤ちゃんのお腹がぼっこりしている」と、モチーフのより詳細な点に着目した感想もあった。「場所はどこだと思う？」という質問に対して「病院」との回答（絵の中のどういうところからそう思ったかを聞くと、「お花がある」「布団があるから」）、「お家」（「座っているところがソファーに見えたから」という回答があった。同じ質問に対して、地域を想像して「アジア、インドネシア」（「水があって花があるから」との発言、その後に「ヨーロッパ」という意見もあった。「アジア、インドネシア」と回答した幼児は、インドネシアに行ったことはないとのことだったが、過去にテレビや絵本などで見たインドネシアの印象などから思いついたのかもしれない。作品に見られる色に関

して「青いところは何だと思う？」という質問に対しては、「雲」「海」「池」と様々な回答が出たが、緑色の部分については「草」という意見で一致していた。「赤ちゃんは男の子、女の子、どっちだと思う？」という質問に対しては「髪の毛が女の子っぽい」という回答、反対に「（髪を）結んでいないから男の子」という回答もあった。本作が今から120年前に描かれた作品であること、また、描かれているのが男の子で、当時の西洋では幼い男の子の髪をのばす習慣があったことを伝えると、驚きの反応があった。参考作品として同じくカサットが描いた《娘に読み聞かせるオーガスタ》（1910年、油彩・カンヴァス、アーティゾン美術館所蔵）の図版を見せると、同作に描かれた少女について「20歳？」とコメントした幼児がおり、それに対して、「ビール飲める（歳）じゃん」と反応する幼児も見られた。ギャラリートーク中に発言をすることがなかった幼児たちも、熱心に耳を傾けていた。

自由鑑賞の時間には、親子で、または親しい親子同士で連れ立って、鑑賞を楽しむ様子が見られた。抽象的な絵画作品の中に見えるものと思うものを、自分なりに想像して言葉にする幼児の感性に、保護者が感心する姿もあった。

レクチャールームでは、幼児たちはアーティゾン美術館が所有するオーギュスト・ロダン《考える人》のレプリカを触り、《考える人》と同じポーズを取る体験を楽しんだ。オリエンテーションの際に同レプリカを紹介すると、ロダン《考える人》を見たことがある、という幼児が7名いた。そのうち1名は、「眼科検診で見た」とのこと。同レプリカは、令和2年12月に、M幼稚園隣のM小学校の展覧会の際に貸し出しており、会期中同校のラウンジルームに展示されていた。その会場がM幼稚園児の眼科検診の会場となっており、その幼児はその検診時に目撃したことを覚えていた。

#### （6）幼児が参加するスクールデーの今後に向けて—小学生との比較

令和2年から3年にかけて、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、アーティゾン美術館のラーニングプログラムもその多くが開催中止や規模縮小、オンラインでの代替開催となった。開館日に行うスクールプログラムについては、児童・生徒・学生の感染リスクを減らすため、学校の方針により参加を中止もしくは延期せざるを得ない学校団体が少なくなかった。その中で、他の来館者がいない休館日に開催するスクールデーは、立ち上げ段階では全く予想していなかったが、密を避けて安全に鑑賞できるという点で、結果としてコロナ禍において非常に有効な取り組みとなった。この度のスクールデーにおいても、マスクの着用、入館前の美術館入口での手指消毒をはじめ、感染防止対策を万全にして行った。

アーティゾン美術館では、ブリヂストン美術館時代はスクールプログラムに申し込む学校団体は小学校が多く、毎年約40校の小学校を受け入れてきた実績がある（貝塚・細矢, 2015）。アーティゾン美術館として開館以降のスクールデー/スクールプログラムへの申込みも、令和2年は小学校が特に多い傾向があった。しかし令和3年には、来館からアウトリーチに変更となったものも

含めると、小学校から大学までの来館数はほぼ横並びで、より多様化している。アーティゾン美術館の取り組みが、学校団体により幅広く浸透しつつあることがうかがえる。

スクールプログラムへの幼稚園の申込みはブリヂストン美術館時代より実績があったものの、スクールデーへの幼稚園の申込みはM幼稚園が最初であり、令和2年と3年においては唯一であった。

アーティゾン美術館では、幼児に特化したラーニングプログラムは開催していないが、小学生とその家族を対象に、平成13年7月より開催している「ファミリープログラム」にて、小学生参加者の弟・妹である幼児の参加を受け入れてきている。

小学校へのスクールプログラムについて、ブリヂストン美術館では、平成12年に3校の小学6年生を対象に、来館から約6カ月後に追跡アンケートを行い、平成27年にそのうちの1校のアンケート結果を集計し、分析・考察している（貝塚・細矢，2015）。ファミリープログラムについては、同プログラムの14年間の開催記録・参加者への事後アンケート、ならびに2020年に行った追跡アンケートの結果をまとめ、分析・考察している（江藤・大高・貝塚・細矢，2020）。ブリヂストン美術館における小学生の鑑賞とその成果については、詳しくは各著を参照されたい。

この度のM幼稚園の受け入れを通し、幼児がのびのびと鑑賞する環境として、休館日に行うスクールデーが非常に適していることが明らかになった。ギャラリートークの際、幼児からは非常に活発に意見が上がり、また、自由鑑賞では親子や友達同士で話しながら鑑賞する姿も多く見られたが、声量に関して他の来館者を気にする必要がないため、保護者も安心して様子であった。混雑がなく、感染予防の観点でも同様である。

M幼稚園の幼児（5歳児）による鑑賞と、小学生（6学年の開きがある）の鑑賞とを一概に比較することはできないが、特筆すべきは、（5）に記載した通り、幼児たちが、作品の視覚的情報を固定概念なく自然に自由に受け止め、自分なりに読み解いて、いきいきと言葉にすることであった。ギャラリートーク時の質問に対してもすぐに反応があり、初めて訪れる美術館という場所、初めて目にする作品への積極的な興味・関心が感じられた。5、6歳児が親しみやすいライオンがモチーフの作品と、同じく親近感や共通点を感じやすい母と子がモチーフの作品を選定したに加え、作品を見て感じたことは全て正解であり、安心して自由に発言して欲しい旨を伝えたことも有効だったと考えられる。アーティゾン美術館では、対象に応じて、適切な方式のギャラリートークを準備し実施している。この度のギャラリートークでは、対象の5、6歳児にとってわかりやすく、楽しめることを念頭に、先ず作品をよく見ることを促した上で、作品の視覚的情報を中心に平易な言葉で幼児に質問をし、幼児のコメントを一つ一つ丁寧に拾い、否定をすることなく対話しながら進行したことが奏功した。幼児にとっての作品の見やすさや、集中力も考慮し、鑑賞する位置を誘導したり、座ることを促したり、トークの時間配分を決めたことも効果的だった。

課題としては、美術館での「3つの約束（作品やケースに触らない、走らない、大きな声を出

さない)」の認識を5、6歳児に徹底させることの難しさである。作品や美術館という場所への興味・関心が先に立ち、理解はしていても、作品を触りそうになってしまう、館内を走りたくなってしまふ、という様子もあったが、同時に、美術館職員・保育者・大学生、且つ幼児1人につき保護者1人と、十分な大人の目があったことは安全面で大きく、館内での対策は行き届いていた。今後に関しては、あらかじめ幼稚園でも幼児に「3つの約束」を伝えてもらい、予習してきてもらふ、という改善策があると考えている。

この度のスクールデーは、幼児が本物の美術作品に直接接し、保護者とともにリラックスして鑑賞する機会という点で、非常に有意義であったと考える。幼児の団体を受け入れる体制を引き続き整え、幼児が美術作品に接する機会をより多く提供していくことを、アーティゾン美術館は目指している。



Fig.3 アーティゾン美術館スクールデー 記録写真

（江藤祐子）

#### 4. 保護者の視点

美術鑑賞会を行った幼児に対し意見や感想を尋ねたかったが、個別にインタビュー調査等を実施することは難しいことから、一緒に参加した保護者を対象に質問紙調査を実施することにした。

##### （1）方法

- ① 調査対象者 親子美術鑑賞会に参加した者のうち、調査に協力した保護者24名（男性2名、女性21名、その他1名）を調査対象とした。
- ② 手続き 無記名、自記式による質問紙調査を行った。事前に幼児の在籍する幼稚園の園長、副園長を通じて研究目的と方法について文書と口頭で説明した。美術鑑賞会当日、保護者に説明し、鑑賞会終了後、質問紙の配布を行った。質問紙の回収は箱を用意した。
- ③ 調査項目 調査項目は、当日の美術鑑賞会への感想や、親子での芸術経験、保護者自身の芸術経験などについてである。
- ④ 調査時期 調査は令和3年6月14日に実施した。
- ⑤ 倫理的配慮 本研究は、令和3年5月31日に國學院大學ヒト研究等及びヒト由来試料研究等

に関する倫理委員会の承認（承認番号：ヒト研究 R03 第 4 号）を受けた。

## （2）結果

本研究では質問紙調査の結果から、当日の美術鑑賞に直接関係のある項目について取り上げることにする。質問項目①～⑤、⑦～⑨は、質問に対し「非常にそう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の 5 件法で尋ねた。

### ① 美術鑑賞が楽しかったか

美術館での親子での美術鑑賞は楽しかったか、尋ねた結果を Fig. 4 に示した。

「非常にそう思う」が 62.5%（15 名）、「ややそう思う」が 37.5%（9 名）であった。「どちらでもない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答したひとは皆無であったことから、今回の美術鑑賞会に参加した保護者全員が楽しいと感じていたことがわかる。

### ② 鑑賞時間

鑑賞する時間（1 時間）は充分だったかについて、もっとも多い回答は「非常にそう思う」の 54.2%（13 名）、次いで「ややそう思う」、「どちらでもない」がそれぞれ 16.7%（4 名）、「あまりそう思わない」が 12.5%（3 名）、「全くそう思わない」0%であった（Fig. 5）。70%以上の保護者が鑑賞時間は適切であったと考えていた。

### ③ ギャラリートーク

ギャラリートーク（作品の前での学芸員の説明）はわかりやすかったか、について、もっとも多い回答は「非常にそう思う」で 87.5%（21 名）、次いで「ややそう思う」が 12.5%（3 名）であった（Fig. 6）。

### ④ 美術鑑賞会への満足度

今回の美術鑑賞会について満足したか、について尋ねた結果（Fig. 7）、「非常にそう思う」が 83.3%（20 名）、「ややそう思う」16.7%（4 名）であった。「どちらでもない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答したひとはいなかったことから、今回の美術鑑賞会に対する満足度は高いと考えられた。

### ⑤ 幼稚園と美術館の連携企画

幼稚園と美術館との企画全体について満足であったか、尋ねたところ、もっとも回答が多かったのは「非常にそう思う」83.3%（20 名）で、8 割以上の保護者が、幼稚園と美術館との鑑賞会企画にとっても満足していることがわかった。「ややそう思う」が 8.3%（2 名）、「どちらでもない」と「無回答」が 4.2%（1 名）であった（Fig. 8）。

### ⑥ 親子美術鑑賞会の経験

親子での美術鑑賞会に参加した経験の有無について回答を求めた（Fig. 9）。参加したことが「ある」と回答した保護者は、8.3%（2 名）、参加したことが「ない」という回答は 91.7%（22 名）であった。さらに、これまで親子美術鑑賞会に参加した経験が「ある」と回答した保護者に、ど

この美術館の親子の鑑賞会に参加したのか尋ねたところ、「現代美術館」「出張のものでアートに触ってみよう」という回答が得られた。

⑦ ひとに薦めたいか

親子での美術鑑賞を周囲のひとにも薦めたいか尋ねた結果 (Fig.10)、回答がもっとも多かったのは「非常にそう思う」が50.0% (12名)、次いで「ややそう思う」が33.3% (8名)、「どちらでもよい」が16.7% (4名)であった。

⑧ アーティゾン美術館での親子の美術鑑賞にまた参加したいか

アーティゾン美術館での親子の美術鑑賞にまた参加したいかについて、尋ねた結果をFig.11に示した。もっとも多い回答は「非常にそう思う」の45.8% (11名)。次いで「ややそう思う」の41.7% (10名)、「どちらでもない」12.5% (3名)、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答した保護者はいなかった。

⑨ 他館での親子の美術鑑賞に参加したいか

他の美術館での親子の美術鑑賞があれば、参加してみたいと思うか、尋ねたところ、もっとも多い回答が「非常にそう思う」の54.2% (13名)、次に多かったのは「ややそう思う」の41.7% (10人)、続いて「どちらでもない」4.2% (1名)であった (Fig.12)。「ややそう思う」「全くそう思わない」という回答はなかった。

⑩ 美術鑑賞会でよかったこと

今回の美術鑑賞会でよかったことについて、自由記述で意見や感想を求めた。

その結果 (Table 1)、「ギャラリートーク」に関することと、「美術館の環境」に関すること、「その他」の3つについて意見や感想を分類することができた。「ギャラリートーク」に関することでは、「学芸員の説明」と「幼児の発言」について、「美術館の環境」については「展示作品」に関することと、今回の美術鑑賞会が幼稚園の親子のみのスクールデーであることに集約された。「その他」では、保護者自身が美術館に行く機会が久しぶりであったことについて書かれていた。記述内容は全て今回の美術鑑賞会について肯定的な意見や感想が多く、否定的な記述はみられなかった。

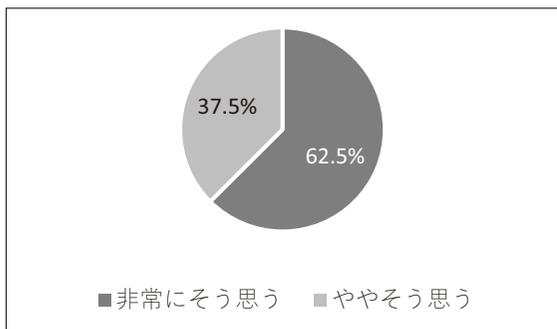


Fig. 4 美術館での美術鑑賞は楽しかったか

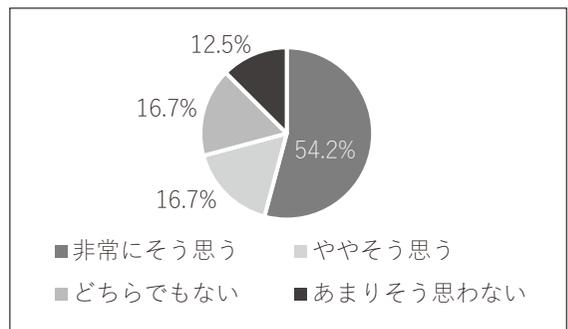


Fig. 5 鑑賞時間の適正

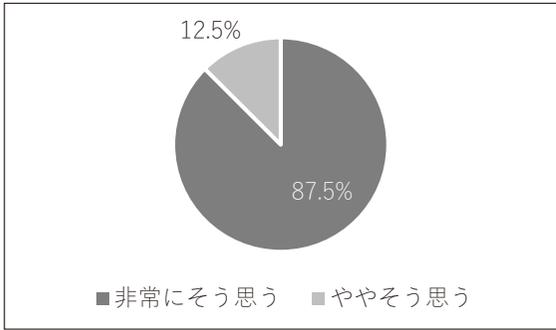


Fig. 6 ギャラリートークのわかりやすさ

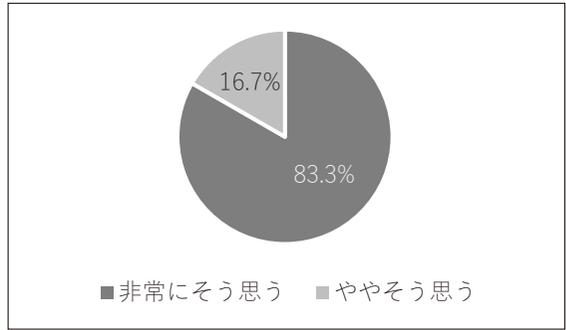


Fig. 7 美術鑑賞会への満足度

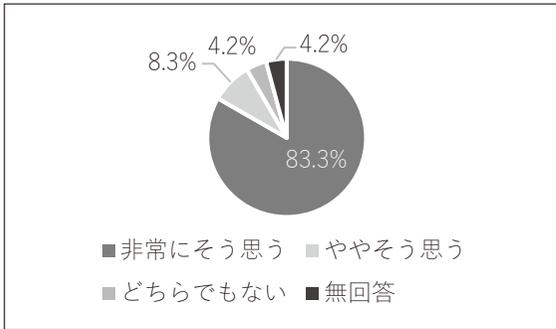


Fig. 8 幼稚園と美術館の連携企画への満足度

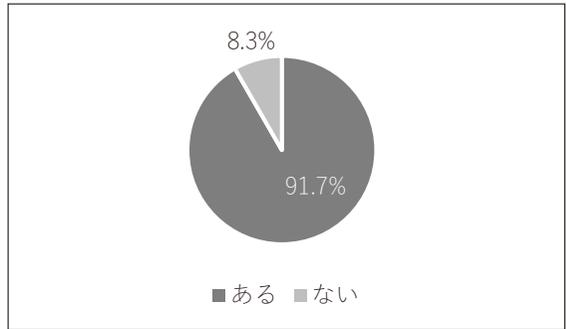


Fig. 9 これまでの親子での美術鑑賞会の経験

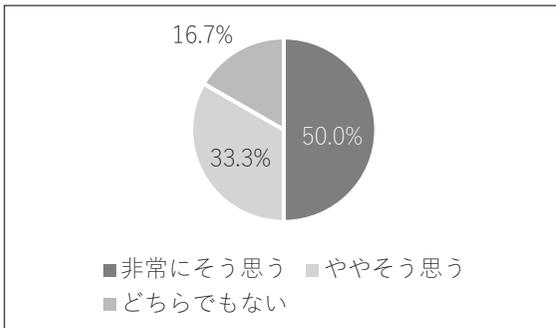


Fig.10 親子の美術鑑賞会をひとにも薦めたい

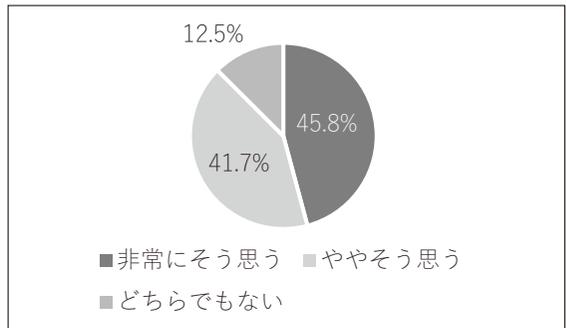


Fig.11 同館の親子美術鑑賞にまた参加したい

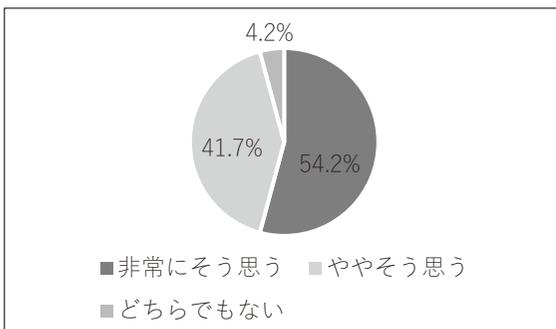


Fig.12 他館の親子美術鑑賞に参加したい

Table 1 今回の美術鑑賞会でよかったこと

カテゴリ		度数	回答例
ギャラリートーク	学芸員の説明	9	子どもの目線での絵の解釈など聞けてとても興味深かったです。
			自由に鑑賞するだけでなく、説明して下さったところ。子どもにわかりやすく興味を持てるような説明でした。
			子どもが飽きてしまうかと思っていましたが、係の方のお話しが上手で子どもたちもとても楽しそうでした。
	幼児の発言	7	1つの絵を深く掘り下げ、子どもの考えを聞いたのがとても楽しかったです。
			普段、見ることのないものをこんな風に見えるね、とみんなで話すところが楽しそうでした。
			題名がわからない（読めない）子どもたちが自由に想像して作品について話す姿を見れて、また親子で会話しながら鑑賞できたのがとてもよかった
美術館内の環境	展示作品	2	作品も充実していて楽しませていただきました。 カラフルなもの、動物など、子どもの興味の引くような展示もあった。
	展示の工夫	1	見学する前後でタッチパネルで好きな絵、見た絵などをまた振り返ることができて、楽しそうでした。
	スクールデー	4	子どもが騒いでも大丈夫な環境で美術館を訪ねられたこと。
			貸し切りにしていただけて、のびのびと子どもと感想を話しながら見れた。
その他		2	普段、親子で美術館に行くことがないので、久しぶりに私も美術館に行けてとても新鮮でした。

（島田由紀子）

## 5. 考察

初めて美術館に行ったとき、楽しく感じられるかどうか、その後の美術作品への興味や関心に大きく影響することが考えられる。今回、美術鑑賞会に参加した保護者の全員が「楽しかった」「満足している」と回答していることから、参加した幼児も楽しいと感じていることが推測できる。したがって、この美術鑑賞会を肯定的に捉えていたと考えられる。また、「ひとに薦めたいか」「アーティゾン美術館での親子の美術鑑賞にまた参加したいか」「他館での親子の美術鑑賞に参加したいか」との問いにいて、「非常にそう思う」「そう思う」と80%以上の保護者が回答していること

から、美術館を身近に感じ、美術館での美術鑑賞や親子での美術鑑賞への興味や関心につなげることができたと考えられる。

「鑑賞時間の適正」については事前に園側と相談の上、幼児の集中できる時間を配慮し1時間に設定したところ、70%以上の保護者が適正と回答しながらも、12.5%の保護者が適正とまでは思っておらず、もう少し鑑賞する時間が欲しかった、という声が聞かれたことから、鑑賞時間を1時間以上にするについて検討する必要があるかもしれない。

幼稚園の徒歩圏内にあるアーティゾン美術館は保護者にとって身近であることから、これを契機とし、家族で美術館に足を運んだり、家族向けの鑑賞会に参加したりすることにつながることに期待できる。また、これまで幼児を対象とした美術館での美術鑑賞がほとんど行われていない理由として、美術館が近くにないことが考えられる。湯浅（2021）によると、小・中学校で鑑賞教育を行う際、美術館を利用しない要因として、美術館までの距離が遠い、という回答がもっとも多いことが報告されていることから、幼稚園と美術館の距離は大きな要因であると考えられる。さらに、引率する保育者数が小学校以上に必要とすることが予想される。幼稚園から美術館までの道中の安全の確保、美術館での3つの約束（作品やケースに触らない、走らない、大きな声を出さない）について、小学生よりも幼児の方が難しい場面が想定できる。当初、美術鑑賞会の実施にあたり幼稚園の保育者が複数で引率することになっていたが、近隣とはいえ交通量の多い道を歩くことや鑑賞中の幼児の姿を予想し、幼稚園側からすべての保護者の同行を提案され、親子での美術鑑賞会となった。公立幼稚園ということもあり全員の保護者の協力を得ることができたが、保育所や認定こども園の場合、すべての保護者が参加することは難しい。したがって、幼稚園や保育所等と美術館の距離、引率者の確保が、幼児を対象とした美術鑑賞会の実施を困難にしていることが考えられた。

また、美術館の休館日のプログラムを活用したことで、幼児が大きな声を出したり走ったりするような場面があっても、他の来場者に迷惑をかける心配をする必要はなく過ごすことができたことは保育者、保護者、美術館にとって安心感となった。幼児によっては美術館での3つの約束（作品やケースに触らない、走らない、大きな声を出さない）を1時間守ることは難しい場合や作品を見ることへの集中が続かない様子もみられた。そういった幼児にとっては、館内の「デジタルコレクションウォール」（タッチパネルサイネージ）による作品の閲覧や、大学生が用意した工作の場が助けになったことから、美術作品と向き合う以外の工夫や準備も必要であろう。

質問項目の「説明のわかりやすさ」への高い評価と自由記述にみられたように、学芸員の説明や言葉かけが幼児の実態に沿ったものであったことが、参加者の楽しさや満足につながったと推測できる。受け入れる美術館、ファシリテーターとしての役目を果たす学芸員等が、幼児理解に基づく計画の立案、作品の選択、幼児への関わりを実践していたことが美術鑑賞を成立させる大きな要因となっていた。学芸員のこれまで小学生を対象とした美術鑑賞やファミリープログラムでの経験の蓄積が、幼児にもわかりやすい、興味や関心を惹く説明や幼児の発する言葉を聞き逃

さずに受け止め共感することで、対話が成立していたことが非常に効果的であったと捉えることができる。

保育者が幼児と言語によるコミュニケーションをする際、「発問」「受容」「過程」のプロセスに沿って意識的に言語を用いることで幼児の知的好奇心が育まれるといわれている（竹内・大黒・飯田・宮原・宮原，2004）が、美術作品の説明や言葉がけを行う者が、「発問」、そして「肯定」「確認」「同意」が「受容」の中で行われているかどうか、幼児の美術鑑賞への興味や関心に影響すると考えられる。自由記述に「子どもの目線での絵の解釈など聞けてとても興味深かった」「自由に鑑賞するだけでなく、説明して下さったところ。子どもにわかりやすく興味を持てるような説明でした」「子どもが飽きてしまうかと思っていましたが、係の方のお話しが上手で子どもたちもとても楽しそうでよかった」「1つの絵を深く掘り下げ、子どもの考えを聞いたのがとても楽しかった」「普段、見ることのないものをこんな風に見えるね、とみんなで話すところが楽しそう」「題名がわからない（読めない）子どもたちが自由に想像して作品について話す姿を見て、また親子で会話しながら鑑賞できたのがとてもよかった」とあったように、作品や学芸員の言葉がけ、友達の発言から一人一人が思いを巡らせ、自分なりの考えを言葉で表現することは、幼児にとって大切である。

しかし、多くの美術館では幼児に対応するだけの工夫や準備ができていないことも考えられる。未就学児だから美術作品を理解するにはまだ早い、作品を見て思ったり考えたりしていることを他者に伝えることが難しい、静かに鑑賞したり説明を聞いたりすることは困難であると判断している美術館もあるかもしれない。そういった場合、保育者養成校の教員が間に入ったり学生を美術館内に配したりする等の方策が考えられる。

府中市美術館の武居（2021）は、小中学校との美術鑑賞の連携について美術館に来ることが目的化している傾向について危機感を持ち、児童や生徒にとってどのような学びを提供するのかということを中心にすべきではないかと疑問を呈している。今回、美術鑑賞会を実施するにあたり、幼稚園、美術館、筆者らの間で複数回の話し合いの場を持ち、メール等での確認を繰り返し行った。幼稚園からは当日の活動案が提出され、集団での学びであることやギャラリートークを踏まえたねらいが示された。美術館に行った経験がほとんどない幼児にとって、友達や保護者、保育者とともに様々な作品を見たり聞いたり話したりする機会は貴重な経験であったと考えられる。

幼児にとっての表現が、造形や音楽や言葉、身体といった括りで考えることは、表現の育ちにとって大事な土台づくりの過程のあり方を誤ってしまうことが指摘されているように（今川，2005）、美術鑑賞が造形表現に直結しなくても、美術作品を見ることの楽しさや面白さ、見て感じたことや考えたことを自由に言葉で表現し、友達や担任の教師と思いを共有することで、豊かな感性が生まれ、造形という括りにこだわることなく様々な表現する力へとつながることが考えられる。

幼児の美術鑑賞を実施するためには、以下の3つの課題が考えられた。幼稚園等から美術館の距離が近く、引率者の確保ができること、美術館側の幼児理解や受け入れるための工夫、配慮がなされていること、保育者による見通しをもった指導計画が立てられていること、である。本研究での実践では、3つの課題について様々な工夫や準備によって補うことができたが、園の実態によって難しい場合も予想される。今後は、今回の美術鑑賞会をモデルケースとし、様々な幼稚園や保育所、認定こども園等と美術館の連携による美術鑑賞会が実現できるよう、サポートする体制について考えていきたい。

（島田由紀子）

## 文献

- アメリカ・アレナス（2005）mite!ティーチャーズキット（1），淡交社
- 江藤祐子・大高幸・貝塚健・細矢芳（2020）美術館と家族：ファミリープログラムの記録と考察，石橋財団アーティゾン美術館
- 今川恭子・宇佐美明子・志民一成（2005）子どもの表現をみる、育てる—音楽と造形の視点から—，文化書房博文社
- 貝塚健・細矢芳（2015）小学生の美術館体験—追跡アンケートをとおして見えてくるもの，館報64号（2015年度），石橋財団ブリヂストン美術館，石橋財団石橋美術館，96-108.
- 金山和彦（2006）幼児期のイメージ形成と知覚的鑑賞活動について，美術教育，286，36-43.
- 三澤一実（2006）対話型鑑賞の意味—アメリカ・アレナスのトークから—，文教大学 言語と文化，19，70-82.
- 文部科学省（2017）小学校学習指導要領，129.
- 文部科学省（2017）幼稚園教育要領
- 文部科学省初等中等教育局 幼児教育課（2017）幼稚園教育要領の改訂について—主な改訂内容—，<http://seiganomori.hoikuen.to/wp/wp-content/uploads/2019/10/8.pdf>（最終閲覧日：令和3年12月30日）
- 武居利資（2021）新型コロナウイルス感染症と美術鑑賞教室の一年，美術による学び 2（10），1-7.
- 竹内里絵・大黒美保子・飯田恵津子・宮原和子・宮原英種（2004）思考を促す応答的保育：『受容』による対応の検証，日本保育学会大会発表論文集（57），716-717.
- 戸澤幸夫（2012）幼児の創造力を高め造形表現に繋がる鑑賞の手立て，人間生活学研究 3，99-109.
- 湯浅大吾（2021）鑑賞作品をつなぎ合わせる活動を取り入れた美術鑑賞学習の可能性—幼児、児童、生徒の学びをとらえながら—，美術による学び 2（1），1-14.

本研究は、島田と江藤の共同研究であるが、美術館としての立場から美術鑑賞会当日の記録を江藤が、美術教育の研究者の立場から美術鑑賞に参加した保護者への質問紙調査と分析、考察を島田が担当した。

謝辞：本研で取り上げた美術鑑賞は、田原雅子先生（中央区立明正幼稚園副園長）、園児と保護者のみなさま、

幼児の美術鑑賞（島田・江藤）

貝塚健氏（アーティゾン美術館教育普及部長）、細矢芳氏（アーティゾン美術館教育普及部学芸員）、鳥海あかりさん（アーティゾン美術館インターン、お茶の水女子大学大学院比較社会文化学専攻 歴史文化学コース修士課程2年）、宮崎黎さん（アーティゾン美術館インターン、慶應義塾大学大学院文学研究科美学美術史学専攻 修士課程1年）、岩城眞佐子氏（國學院大學教育実践総合センター客員教授）、松尾悠香さん（國學院大學人間開発学部子ども支援学科4年）、山川純香さん（國學院大學人間開発学部子ども支援学科4年）のご協力により、実施し研究にまとめることができました。深く御礼を申し上げます。

（しまだゆきこ 子ども支援学科教授）

（えとうゆうこ 石橋財団アーティゾン美術館 教育普及部学芸員）